
七つの罪と七つの剣

九条 檠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの罪と七つの剣

【Nコード】

N3593W

【作者名】

九条櫨

【あらすじ】

生前の罪を浄化する地 煉獄

この地を司る七体の悪魔の“暇潰し”によって、ゲームは幕を開ける。

目的は一つ。

相手を殺し、剣を奪う

ルールはなし。剣を奪うなら、どんなことだろうと許される。

そんな非情なゲームが始まりを迎える。

プロローグ

「煉獄の七大罪を司る私たちに選ばれた、憐れな七人の罪人たちよ！」

ピンク色の髪を有したセミショートショートの少女が叫んだ。身嗜みに気を使っている様子のお洒落な少女で、若干の色気を漂わせている。

「お前たちにはこれからゲームを行ってもらおう！」

黄土色の髪を有したツインテールの少女が、最初に叫んだ少女の言葉の続きを紡ぐように叫んだ。その手に握られているのは、何のものかわからない肉の塊。自身の台詞を言い終わったあとに、彼女はその肉を一口かじった。

「ルールは簡単！」

次に言葉を口にしたのは、茶髪でセミロングの髪を有した少女。その瞳にはどんなものでも手に入れてみせるという強欲さが滲み出ていた。

「相手を殺し、剣を奪え」

手入れをしていない様子のボサボサな黒髪を有した少女が、茶髪の少女の続きを紡ぐ。その声にはやる気がこもっていなかった。

「勝者には楽園の扉を開く権利が与えられる」

軽いウェーブのかかった緑色のロングヘアをした少女が次に言葉を口にする。彼女は嫉妬の感情を隠すこともせず、醸し出させていた。

「敗者には死ぬよりも酷い永久とわの拷問だ」

この場にいるなかで一番目つきが鋭く気の強そうな、ショートヘアで赤髪の少女は、自身が口にしたその行為を七人の中で最も楽しみにしている様子だった。

「さあ、ゲームの始まりだ！」

最後に叫んだのは、その場にいる七人のリーダー格だと思われる、膝裏ほどまでの長さのストレートヘアを有した銀髪の少女。その目

には、視界に入るものすべてを見下して馬鹿にするほどの傲慢さが表れていた。

すべてのことを言い終えた彼女たちは笑い声を上げた。それは悪魔というに相応しい、意地汚さと汚らわしさを含んだ笑い声だった。

参加者たち

「さあ、ゲームの始まりだ！」

七体の悪魔によるゲーム開始の宣言が煉獄にこだまする。

* * *

「もう開始ですか……。もう少しだけ時間が欲しかったです……」

その青年は残念そうな様子を醸し出しながら、ズレていた眼鏡を指で直した。

「まあ、いいでしょう。大体の調査は終わったので……」

青年は手にした剣を一瞥する。

装飾が美しいその剣は、戦闘よりも祭事さいじなどに使われそうな雰囲気
を漂わせていた。

「きつとボクの勝利で終わるでしょうね」

端正な顔立ちの青年は、得意げと同時に不敵な笑みを浮かべた。

その時、彼の持っていた剣の刃はが一瞬だけ煌めいた。

「ボクはどんな状況でもトップに君臨する存在なんだ……」

* * *

「やっと始まるのね。待ちくたびれて死んじやいそうだったわ」
ふわふわとした喋り方の女性は嬉々とした様子で微笑むと、腰を
掛けていた岩から立ち上がった。

「こんな場所じゃあせつかくのお洋服がすぐに汚れちゃうわ」

活火山帯のようなこの場所には不釣り合いなドレスを着込んでい
る女性は、しなやかな動作で汚れをはたき落とすと、岩に立て掛け
ていた細長い剣と片手用の小振りの斧のような成形をした剣二本を

掴み取った。

「“カワイイコ”はいるのかしら？ とても楽しみですわ」

笑顔を絶やさない女性は期待に胸を膨らませている様子で二本の剣を優しく抱くと、小さな声で呟いた。

「……私がズタズタに愛してあげますわ」

* * *

「おっせーんだよッ！」

その男はそう叫びながら、頭上高くに振り上げていた剣を冷え固まった火成岩へと力任せに叩きつけた。

火成岩は木っ端みじんに砕け、破片が周囲に散らばった。巨大でぶ厚い刃を持った剣は、強固な火成岩を砕いても刃毀れ一つしていない。

「まあいい……。とりあえずゲームは始まったんだ、好きなだけ暴れさせてもらうぜ……」

男は巨大な剣を軽々しく担ぐと、獲物を探し出すために歩きだす。
「どんなやつだろうと簡単にひねり潰してやる……」

* * *

「『全部の剣を集める』ねえ……」

巨大な火口を背にした女が、自身の手にした剣を訝しげに眺めながら「そんなことよりワタシはなんか食いたんだけどなあ」と呟いた。火口からは大量の熱気と煙が上がっているが、女の身体には一筋の汗もなく平然とした様子で地面にあぐらをかいて座っていた。
「食欲は偉大よ。お腹が空いてなくても美味しいものは食べたくないっちゃんものね、うん」

女は自身の放った言葉に自身で納得すると、槍にしか見えない剣を支えとして立ち上がった。

「んじゃ、ゲームも始まったことだし、そろそろ動きますか！」

女が薄ら笑いを浮かべると、それに呼応したかのように火山が盛大に噴火を起こす。

「さーて、ワタシのメシはどこだ？」

* * *

「剣を全て奪うのか……」

落ちて着いた印象を与える男が呟く。

彼が持つ剣の刃には握りこぶし大のガラス玉がはめ込まれており、男はそのガラス玉を通して見える逆さになった世界を眺めていた。

「……物足りないな」

男は身体の中に溜めていた空気を吐き出した後に不満げに呟いた。

「どうせなら奪えるものは全て奪うべきだろ？」

周囲に誰かがいるでもないが、男の口からは疑問の言葉が紡がれる。先ほどまで無表情だった男が浮かべた笑みは強欲さにまみれ、浅ましさの塊でしかなかった。

「ここに存在するすべては俺のものだ……」

* * *

「わたし、こんなところで時間を浪費している場合じゃないんだよね……」

その少女はキャスケットを目深に被り直すと、地面に突き刺さっていたレイピアを抜き取った。

「こんなことしてる間にも彼には魔の手が迫ってるんだから……」
彼女がそう口にする、手にしていたレイピアは細さと鋭さを上げる。

「わたしが守ってあげないと……」

彼女の決意は、手にしている細い剣とは裏腹に強固で大きかった。

「待っててね、今すぐ会いに行くから」

* * *

「……………ん」

仰向けに寝そべっていた少年が目を覚ます。

上半身を起こした少年はゆっくりと周囲を見渡した。

「……………ここ、どこだ？」

少年の視界に映るのは老朽化して崩れ落ちた柱の数々。それはこの場所に神殿が建っていたという証拠だが、そのような面影を掴むのは困難なほどに柱は朽ち果てていた。

「それで……………」

煮えたぎった溶岩によって照らされた神殿後を一瞥した少年は、厚い灰煙で埋め尽くされた空を仰ぎ見て呟いた。

「……………おれは……………誰だ？」

* * *

こうして悪魔の気まぐれによる残酷な“ゲーム”は始まりを迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3593w/>

七つの罪と七つの剣

2011年11月30日15時53分発行